



いよいよ冬本番。毎年様々な野鳥が越冬し、なかには珍しい種類も訪れ、私たちを楽しませてくれます。さて、今回はちょっと古い記録ですが、カモメの仲間、シロカモメの観察記録と、その検討をご紹介します。内容はやや専門的ですが、写真が無い記録の場合、どれだけ細かく観察・記録して検討するかが識別の信頼性を左右します。今回のケースは、そうした「細かさ」、「慎重さ」の例としてもお読みください。それでは最初に、総まとめから。

シロカモメ *Larus hyperboreus*

日本では亜種シロカモメ *L.h.pallidissimus* が、主に本州北部以北で越冬する(※1)。西日本では稀と言われ、瀬戸内海では徳島県小松島市和田ノ鼻(1984.6.5、若鳥1羽)(※2)、広島県御調郡向島町高見山(1987.11.1、1羽)(※3)などの記録が文献で確認できる程度である。

香川県では、1996年に豊浜町花稲漁港でシロカモメと思われる個体1羽が観察された(1996.7.24、8.13、8.22 など。全て同一個体)(※4)が、後に誤認という結論に至っている。その他は観音寺港での観察報告(2001.3.4、第1回冬羽)だけが公表(※4)されている。

なお本種のような外洋性の種類の場合、沿岸部からの観察は難しく、瀬戸内海へ本当に数年に1度しか飛来していないのか、実は少数が毎年越冬しているのかは、実際は不明である。同様に記録の少ないミツユビカモメも荒天時には沿岸で観察されていることから、若鳥や幼鳥を見過ごしている可能性も考えられる。

では、上記の「観音寺港での観察報告(2001.3.4、第1回冬羽)」をご紹介します。

シロカモメの観察と検討

岩田 篤志

○観察時の状況

年月日：平成13年3月4日(日) 午後5時頃

観察地：観音寺市観音寺港(港南西側)

天候：曇時々雨、強風(観察直前は非常に強いみぞれ交じりの雨。観察時はやんでいた。)

観察者：曾根俊二、岩田篤志、岩田のり誉

この日の天気は非常に悪かった。ただオオハム類のような外洋性の鳥類は悪天候の時に沿岸に近寄りやすいことから、「何か見られるかもしれない」と考え、余木崎から沿岸部を観察して行った。その結果、非常に強い雨の中、柞田川河口ではユリカモメに混じるミツユビカモメ2羽を観察できた。

そこでさらに北上し、観音寺港へ向かった。港には風雨を避けて多くのカモメ類が集まり、突堤の上にはユリカモメの他、セグロカモメ・オオセグロカモメなどの大型カモメ類が少数いた。また港内の海上にはユリカモメの群がいた。

問題のシロカモメと思われる個体は突堤の右端にいて、再び雨が降りだすまでの30分以上、フィールドスコープで観察した。その時ほぼ同距離にセグロカモメ第1回冬羽がいたので、これと比較しながら特徴を確認した。なお機材を持っていなかったため、写真等は撮影できなかった。

○観察した個体の特徴

- 同距離の突堤にいたセグロカモメに比較して、明らかに大きく感じられた。
- たたんだ状態での初列風切は白色で、茶褐色などの斑は全く無かった。
- 初列風切の擦り切れ、磨耗は無く、長さ・形状に変わった点は見られなかった。
- 肩羽・雨覆などに薄く小さい褐色斑があった。セグロカモメ第1回冬羽と比較すると、明らかに斑は小さく、淡かった。



▲こんな個体でした(※6より転載)

- e. 影になっていたが、脚は明るい肉色だった。
- f. 嘴は根元から2／3程度が明るいピンク色で、先端が黒色であり、その境界は明瞭だった。セグロカモメ第1回冬羽の嘴に比較すると、特に嘴のピンク色は非常に鮮やかに感じられた。
- g. 褐色斑は目先周辺にわずかにあるが、頭頂部から頸部にかけては無かった。
- h. 頭頂部がやや平たくなっており、頭部の形状は丸くなかった。

○ 検討

シロカモメ第1回冬羽の可能性 ⇒ 最も高い

- ・シロカモメの第1回冬羽の初列風切は淡い茶褐色を帯びるが、摩耗・褪色により徐々に白色に近づく(※5)。また嘴は付け根がピンク色で先端1／3が黒く、その境界は明瞭である(※6)。これらの特徴は観察個体と一致し(= b, f)、その他の全身の模様、大きさなども特に異なる点はない。

セグロカモメ第1回冬羽の可能性 ⇒ 無い

- ・本種の第1回冬羽の初列風切は黒褐色で、観察個体と明らかに異なる(≠ b)。なお磨耗・褪色して白くなった可能性は、本種の初列風切の羽色変化は比較的少ない(※5)ということから、シロカモメと間違えるほど淡色にはならないと考える。
- ・本種は肩羽のイカリ型模様など、背部の模様が明瞭である点(※5)で、観察個体とは異なる(≠ d)。

オオセグロカモメ第1回冬羽の可能性 ⇒ 無い

- ・本種の第1回冬羽の初列風切は黒褐色から灰褐色まで個体差があり、各羽の羽先には淡色の縁取りがある(※5)。しかし観察個体は一樣に白色であり、淡色の羽縁は見られなかった点で異なる。ただオオセグロカモメは褪色が甚だしく、初列風切がかなり淡色になる個体があるといわれ(※5)、その可能性が残る。
- ・本種の第1回冬羽では、嘴は黒くて基部がわずかに肉色がかかる程度であり、その境界は不明瞭(※5の図、6の図)である。観察個体とは明らかに異なる(≠ f)。

ワシカモメ第1回冬羽の可能性 ⇒ 無い

- ・第1回冬羽の初列風切は、褪色によって淡色になる(※5)。しかし嘴は黒色で、観察個体と明らかに異なる(≠ f)。

アイランドカモメ第1回冬羽の可能性 ⇒ 無い

- ・シロカモメ第1回冬羽に似るが、大きさは通常セグロカモメより小さく(※5)、観察個体と異なる(≠ a)。
- ・嘴の黒色とピンク色の境界は明確でないことが多く(※5)、観察個体と異なる(≠ f)。
- ・頭部は丸みがあり、観察個体と異なる(≠ h)。

○ 結論

観察した個体は、全員がシロカモメ第1回冬羽という結論で納得した。また筆者と岩田のり誉は千葉県銚子市でシロカモメ第1回冬羽を観察したことがあるが、その経験から考えてもシロカモメ第1回冬羽と判断した。

カモメ類を観察しよう！

瀬戸内海では珍しいカモメ類はほとんどいないと思われていること、カモメ類は識別が難しいこと、何と言っても寒いことから、残念ながら香川県で越冬するカモメについては、あまり注意して観察されていません。しかし近年よく見られるズグロカモメ、荒天時に沿岸に飛来するミツユビカモメ、たまに見る「足の黄色いセグロカモメ」も見られるなど、実は様々な種類が渡来しているようです。

今回紹介したシロカモメも、おそらく地道に通えば、いつか誰かが出会える種類だと思います。この記事を書きかけとして、この冬、皆さんが「香川県のカモメ類」に興味を持っていただければ幸いです。

— 参考文献 —

- ※1 「日本鳥類目録 第6版」日本鳥学会、2000
 ※3 「ひろしま野鳥図鑑」日本野鳥の会広島県支部、1998
 ※5 「カモメ識別ガイド」氏原巨雄・氏原道昭、1992

- ※2 「徳島県野鳥図鑑」日本野鳥の会徳島県支部、1985
 ※4 「かいつぶり」日本野鳥の会香川県支部、1996、2001
 ※6 「カモメ識別ハンドブック」氏原巨雄・氏原道昭、2000